

中国語の語気副詞“可”の多義性 — 音声持続時間の観点から*

伊 藤 さとみ

1. はじめに

中国語の“可”については多くの研究がある。呂叔湘（1980）は、助動詞の“可”、副詞の“可”、接続詞の“可”、接辞の“可”があると指摘し、助動詞の“可”は許可、可能、価値があるなどの意味を表す、副詞の“可”は強調の語気または疑問を表す、接続詞の“可”は逆接を表す、接辞の“可”は形容詞を作る、と分類している。本研究では、このうち、副詞の“可”、即ち、強調の語気または疑問を表す用法について考察する。副詞の“可”の語気については、伊藤（2022）で、従来の研究を基に8種類を提案し、さらに3人の中国語母語話者への聞き取りを通して、母語話者はこの8種類の意味を理解し区別していることを検証している。本研究では、母語話者はこの8種類の“可”を音声的に区別しているかどうかを調査する。従来、「望みがやっとなうこと」を表す“可”と「程度の高さ」を表す“可”は強勢を伴い、それ以外の“可”は強勢を伴わないと言われてきた。本稿では、12人の中国語母語話者が“可”を含む例文を読み上げた音声と、各話者が“可”の意味を8種類のうちから選んだ結果を照合し、母語話者が意味によって読み方を変えているかどうかを、“可”の持続時間の観点から考察する。結果として、中国語母語話者が「望みがやっとなうこと」を表すと判断した“可”は、持続時間の点でそれ以外の“可”より長いことが明らかになった。だが、「程度の高さ」を表す“可”に関しては、それ以外の“可”との有意な差は見られなかった。これは、母語話者が「程度の高さ」を表すと判断した“可”の範囲が、研究者のものより広いためであることを、

例文の分析を通して明らかにする。

2. “可”の音声的特徴について

2.1. “可”の語気を区別する強勢

“可”の語気の区別に強勢の有無を指摘した研究は多い。初期の研究として楊惠芬（1993）があり、感嘆文で誇張のニュアンスを表したり、望んでいたことが実現したことを表したりする場合、強勢を伴って読まれると指摘している。一方、強勢を伴わない“可”は、陳述文で叙述内容が事実であること、感嘆文で強調や意外性、命令文で切実な言い聞かせや希望、疑問文で疑問や反語の語気の強め、複文の後行節や対比される対象のある文脈で対比を表すと述べている。劉丹青・唐正大（2001）は、主語が話題であることを示す話題演算子の“可”は強勢を伴うと述べているが、例から判断すると、感嘆文で誇張のニュアンスを表す“可”のようである。そして、“可”が対比話題演算子であるとき、即ち、その先行する節と対比の関係にあることをマークするときには、強勢を伴わないと述べている。

強勢の有無により、“可”を2種類に分けるべきという提案を行ったのは、罗晓英・邵敬敏（2006）、蒋协众・魏会平（2008）である。これらの研究は、強勢を伴う“可”は程度副詞であり、その修飾する形容詞や心理動詞句の表す属性の程度が高いことを表すが、強勢を持たない“可”は、逆接を表す語気助詞であり、意外性を表すと述べた。他にも、強勢の有無で“可”を区別することを提案した研究に、李善婧（2009）、李冬梅（2014）、王素改（2016）、杨安珍（2017）、熊慧慧（2020）がある。李善婧（2009）は、強勢を伴う“可”は単指向、即ち、述語に現れた形容詞のみを修飾するが、強勢のない“可”は多指向、即ち、その修飾する述語が何かと対比の関係にあることを表していると述べている。李冬梅（2014）は、強勢を伴う“可”は、程度が高いことや、“终于（ついに）”の意味を表すと述べ、強勢がない“可”は、疑問や逆接、対比、反駁、情報の重要性を表すと述べている。王素改（2016）は、長い間待ち望んでいたことが実現したことを表す“可”は強勢を伴うが、そのほかの“可”には強勢はないと述べて

いる。楊安珍（2017）は、強勢を伴う“可”は程度副詞であり、その他は語気副詞または接続副詞であると述べている。熊慧慧（2020）は、強勢を伴う“可”は喜びや感謝を表したり、程度を表したりすると述べ、強勢のない“可”は疑問、命令、確認、判断、対比、仮定、変化の意味を表すと述べている。

以上をまとめると、“可”には強勢を伴うものと伴わないものがあることは広く認められており、強勢を伴う“可”は、誇張のニュアンス、望んでいたことが実現したこと、喜びや感謝を表す語気副詞であり、形容詞や心理動詞句を修飾する場合には程度が高いことを表す程度副詞であると考えられている。本研究では、この場合の“可”が実際に強勢を伴って読まれるか、また、強勢の有無が話者の判断と一致しているかを調査する。

2.2. 強勢を構成する要素

この節では、強勢が音声学的にどのように定義されているかを述べる。Catford（1988, 2001）は、強勢は、肺気流の圧力、即ち、音の強さという点で定義されると述べている。そして、音の高さ（物理量としては基本周波数の高低、聴覚的高低としてはピッチ）は発声の特徴の一つに過ぎないと述べ、分節音の持続時間に至っては調音の特徴の一つであって、強勢を構成する主たる要素ではないと述べている。ただし、これは英語の語彙レベルでの強勢を念頭に置いたものである。一方、Selkirk（1996）は、英語の文イントネーションの考察の中で、焦点のマークとして強勢が対応することを指摘し、ピッチや音節の持続時間も強勢の構成要素であると考えている。

中国語の強勢については、焦点を表現する音声的手段として研究が進められてきた。石鋒等（2022）は中国語の焦点を示す音声的特徴を抽出することを試み、中国語のイントネーションを数値化する方法として以下の三つを挙げている。

1) 中国語のイントネーションを構成する要素（石鋒等 2022：31）

- a. “起伏度”：当該音節の音が占めるピッチレンジを文全体のピッチレンジで割ったもの。

- b. “音长比”: 当該音節の音が持続する時間を文全体の持続時間で割ったもの。
- c. “音量比”: 当該音節の音の強さを文全体の音の強さの平均で割ったもの。

この定義に基づき、中国語の焦点を示す音声的特徴は、以下のものであると述べている。

2) 中国語の焦点の音声的特徴 (1)

- a. 焦点が置かれた語全体のピッチレンジが広がる (“起伏度”の増加)。
- b. 焦点が置かれた語の最後の音節の持続時間が長くなる (“音长比”の増加)。
- c. 焦点が置かれた語の最後の音節の強さが強くなる (“音量比”の増加)。
- d. 焦点が置かれた語の前の音節が上記の a ~ c の数値について減少すること (Pre-Focus Compression)。
- e. 焦点が置かれた語の後の音節が上記の a ~ c の数値について減少すること (Post-Focus Compression)。

ただし、上記のすべてが焦点の韻律に貢献するものではないと考える立場もある。许洁萍等 (2006) は、ピッチレンジの広がり と 持続時間の長さは、負の相関があると述べている。曹文 (2010)、马秋武 (2017) は、ピッチレンジの広がり が 主要な音声的特徴であり、音節の持続時間が長くなることは補助的な使用であると述べている。

また、音の強さについての特徴を重視しない立場もある。Gårding (1987)、Jin (1996)、Xu (1999)、Peng et al. (2006)、Li (2009) によると、中国語の焦点要素は、以下の音声的特徴を持つ。

3) 中国語の焦点の音声的特徴 (2)

- a. 当該語のピッチレンジの拡大
- b. 当該語の持続時間の伸長
- c. 当該語前後の音声的特徴の弱化 (Pre/Post-Focus Compression)

3) の a と b については、2) の a、b とほぼ同じだが、音の強さの代わりに、前後の音声的特徴の弱化の方が注目されている。

本調査では、“可”が含まれる文は、北京大学語料庫から採取しており、沈炯 (1985) が提案し、中国大陸での中国語音声研究に使われてきたような、例文の声調をすべてそろえた実験や、Gårding (1987) をはじめとする有声音のみで例文を構成した実験とは異なる。また、“可”は第3声であり、この声調に特有の問題もある。そこで、これらの研究の成果を参考にし、本研究で計測できるものとして、“可”の音声の持続時間についての数値を抽出した。以下にその理由を述べる。

まず、焦点強勢を伴う語のピッチレンジが拡大するという点についてだが、第3声音節については異論がある。第3声は、低い声調と言われることもあるように、ピッチ変動よりもピッチの低さが第3声らしさを形成している。例えば、林茂灿 (2011)、陈墨玉・孔江平 (2019) は、第3声の音節に焦点強勢があると、その音節のピッチ最低値が低下することを観察している。第1声、第2声、第4声の場合には、焦点強勢が置かれると、ピッチ最高値の上昇が顕著であるのと比べると、第3声のピッチ最低値が低下するのは特殊なふるまいと言える。また、曹文 (2010) は、きしみ音が出現することが第3声の焦点強勢の特徴であると述べている。本研究で対象とする“可”は第3声であるため、ピッチの上昇やピッチレンジの広がり、強勢を示さない可能性がある。そこで、ピッチ及びピッチレンジの広がりについては計測しない。一方、音節の持続時間の伸長は、石鋒等 (2022) の研究でも、Gårding (1987) 以降の研究でも、強勢を構成する要素の一つとして指摘されている。また、陈墨玉・孔江平 (2019) は、第3声が強勢を伴う場合に、持続時間の伸長が他の声調よりも顕著に現れることを観察している。なお、“可”の前後の音声的特徴の弱化については、それぞれの例の前後の音節を統一していないため、計測しても比較することが難しい。

以上から、本研究では、“可”の音声持続時間について計測した。

3. 調査の方法

3.1. 調査例文について

調査例文の選定方法については、伊藤（2022）とほぼ同じであるが、以下、概略を示す。まず、副詞“可”の語気に関する先行研究を踏まえ、以下の8種類の語気を“可”の語気として確定した。

4) “可”の語気

1. 強調所述内容之真实性（叙述内容が事実であることを強調する）
2. 表示出乎意料的语气（意外性を表す）
3. 表示程度高（程度が高いことを表す）
4. 表示愿望终于实现（望みがやっとなうことを表す）
5. 表示恳切的叮咛和希望（切実な言い含めや希望を表す）
6. 表示疑问（疑問を表す）
7. 表示反驳（反駁を表す）
8. 表示该句与前一句相悖（その文が先行文と対立することを表す）

この分類に基づき、各語気の“可”が含まれると思われる例文を北京大学語料庫（CCL）から採取し、全部で21例文、29個の“可”を抽出した。なお、音声的な特徴を考察することを見据え、“可”の前後の音節の声調をある程度限定している。先行する音節は第3声と第4声に限定し、後続する音節の声調は第1声と第4声を主としたが、語気によっては適切なものが見つからず、第3声や“不”の変調（第2声）が含まれている。また、“可”の意味を正しく判断してもらうため、前後の文を文脈として含め、平均159.75文字、最大で235文字、最小で68文字の文脈をつけた。この29個の“可”について、3名の中国語母語話者に上記4) のリストから主要な意味として一つ、副次的な意味がある場合はさらに一つを選ばせた。主要な意味について3名が一致したのは12個だったものの、2名が一致した例は26個あった。そこで、この26個の“可”に、

2名が副次的意味として同じ語気を選んだ“可”を加え、全部で20例27個を本調査の対象とした。

3.2. 録音について

前節で確定した例文を12名の中国語母語話者がそれぞれ読み上げて録音し、録音後に“可”の意味について、(4)のリストから一つを選ぶアンケートを実施した。例文確定に協力した3名とは別の母語話者12名を対象にしており、出身地の内訳は、台北市、河南省／北京市、黒龍江省、山西省、浙江省／吉林省、石家荘市／江蘇省、広東省／山東省、吉林省、陝西省、河南省／遼寧省、四川省、北京市である（／はどちらにも住んだことがあることを示す）。年齢は録音調査の2022年3月～7月時点で25～30歳、性別は全員女性であり、いずれも大学卒業以上の教育を受けている。

録音時には、Sony Linear PCM Recorder PCM-A10を用い、サンプリング周波数44.1kHzで録音した。録音からの“可”のデータの抽出には、Praat (ver.6.2.14)を用いた。“可”の音節の起点と終点は、母国語母語話者一名が聴覚印象を基に行った後、著者自身が音声波形、フォルマント周波数、パルスなどを参考に確定した。起点は、無声区間を含まず、“k”のパーストを起点とし、終点は“e”の波形の減衰時としたが、“可”の後に母音や流音が続く場合には、フォルマント周波数の変化を参考にした。録音後には、Google Formで作成したフォームにより、読み上げた原稿に含まれる“可”の意味について、(4)のリストから一つを選ぶアンケートを実施した。読み上げた話者とアンケート回答者は同じ番号を与えられており、録音とアンケート結果は対応する。

4. 分析

4.1. 音声の分析

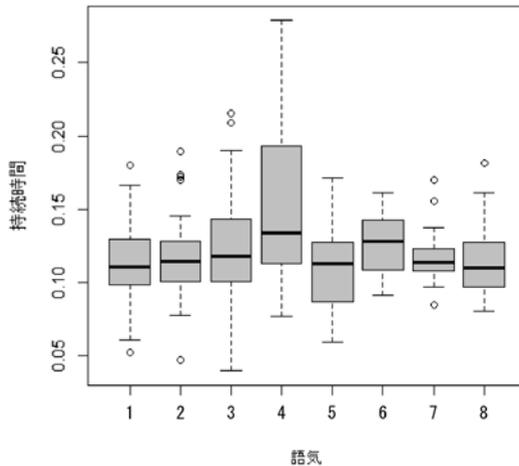
“可”の音声の持続時間を抽出したが、持続時間の計測に影響を与える要素として、後続音の音声的素性がある。そこで、後続音の音声素性による持続時間の平均に統計的な差がないかを調べた。後続音が摩擦音、閉鎖音、破擦音、

流音、母音である各群に分け、分散分析を行った結果、有意な差があった ($F(4,313)=3.801, p=.00493$)。そこで、多重比較(テューキーのHSD検定)を行った結果、流音の持続時間は有意に長いことが分かり、流音のデータ(12個)を排除することにした。ただし、持続時間の分析の時のみ排除し、語気判断の分析の際には含めて分析している。

次に、それぞれの話者が判断した語気ごとに1から8の群に分けた。各群の持続時間の平均が統計的に異なるかどうかを見るため、分散分析を行った結果、グループ間に有意な差があるという結果が得られた ($F(7,298)=6.593, p<.001$)。さらに、テューキーのHSD検定による多重比較ですべての語気を比較した結果、「4. 表示愿望终于实现(望みがやっとなうことを表す)」の“可”は、「6. 表示疑問(疑問を表す)」以外の他の語気のグループの“可”よりも有意に持続時間が長いことが分かった。

図1は、グループごとの持続時間の分布を示している。縦軸は持続時間で単位は秒、横軸は4)にあげた語気の番号である。

図1 語気ごとの持続時間



「6. 表示疑問（疑問を表す）」の用例は南方方言の疑問副詞の影響もあり、必ずしも標準的中国語の用法ではないという指摘もある（朱德熙 1985、吴振国 1990、徐杰・张媛媛 2011）。そこで、考察ではこの用法を除外して考える。

従来の語法分析では、「3. 表示程度高（程度が高いことを表す）」と「4. 表示愿望终于实现（望みがやっとなうことを表す）」の二つが、強勢を伴う“可”であると言われていたが、本研究で音声の持続時間を測ったところ、「4. 表示愿望终于实现（望みがやっとなうことを表す）」の持続時間が長く、「3. 表示程度高（程度が高いことを表す）」については、他の語気と有意な差はないという結果になった。ただし、表1から見て取れるが、「3. 表示程度高（程度が高いことを表す）」の“可”の持続時間は、広範囲に分布している。この原因は、母語話者の判断に原因がある。以下の節で、12名の母語話者の語気判断の結果を示し、具体的な例文から考察を行う。

4.2. 語気判断結果の分析

表1に各“可”の例に対する12名の語気選択状況を示した。左列の漢数字が“可”の例番号、最上段行が語気の種類、数字は12名中何名がその語気を選んだかを表す。灰色のセルは、12名中7名以上が一つの語気を選択したものを示す。

表1. 語気助詞“可”の意味の選択調査結果

	1. 强调 所述内容 之真实性	2. 表示 出乎意料 的语气	3. 表示 程度高	4. 表示 愿望终于 实现	5. 表示 恳切的叮 呼和希望	6. 表示 疑问	7. 表示 反驳	8. 表示 该句与前 一句相悖
一	11	0	0	0	0	0	1	0
二	3	1	4	0	0	0	1	3
三	1	0	0	0	0	0	9	2
四	0	8	4	0	0	0	0	0
五	0	0	2	8	1	0	0	1
六	0	9	3	0	0	0	0	0
七	4	0	8	0	0	0	0	0
八	1	0	0	9	2	0	0	0
九	0	0	0	0	12	0	0	0
十	6	0	3	0	1	0	1	1
十一	8	1	2	0	1	0	0	0
十二	1	0	11	0	0	0	0	0
十三	1	0	0	0	0	0	8	3
十四	0	1	0	0	0	11	0	0
十五	0	0	0	0	12	0	0	0
十六	0	10	0	1	0	1	0	0
十七	1	2	9	0	0	0	0	0
十八	0	0	11	1	0	0	0	0
十九	5	0	2	0	0	0	0	5
二十	1	0	0	0	0	0	0	11
二十一	0	0	1	0	11	0	0	0
二十二	6	0	1	0	2	0	1	2
二十三	0	1	0	11	0	0	0	0
二十四	0	3	9	0	0	0	0	0
二十五	2	0	10	0	0	0	0	0
二十六	4	1	7	0	0	0	0	0
二十七	1	6	4	0	0	0	0	1
合計	56	43	91	30	42	12	21	29

この表から分かるように、27例中22例について、母語話者12名中7名以上が同じ語気を選んでいる一方、二、十、十九、二十二、二十七については判断が分かれた。7名以上が一致して同じ語気を選んだもののうち、「3. 表示程度高（程度が高いことを表す）」と母語話者が判断したものは、七、十二、十七、十八、二十四、二十五、二十六である。それ以外にも、この語気は選ばれやすいことが見て取れるが、以下の考察では、7名以上の母語話者が一致して「3. 表示程度高（程度が高いことを表す）」を選んだ例を中心に考察する。

まず、従来の語法研究では、程度の高さを表す“可”は、以下の特徴に基づ

いて程度副詞に分類されている。

5) 基準1 “真”と連用できない。

基準2 形容詞または心理動詞を修飾する。

基準1「程度副詞の“可”は“真”と連用できない」という点に関しては、楊安珍(2017)、熊慧慧(2020)に言及がある。基準2「形容詞または心理動詞を修飾する」という点に関しては、羅晓英・邵敬敏(2006)、蔣协众・魏会平(2008)、李善婧(2009)、李冬梅(2014)などに、程度副詞と語気副詞の“可”を区別する基準として言及されている。

本調査において母語話者が「3. 表示程度高(程度が高いことを表す)」と判断した例文がこの基準に合致するかを見ると、十七、十八、二十五は上記の基準1と基準2に合っているが、七と二十四は“真”を伴っており、上記の基準1に反する。十二と二十六は“是”を修飾しており、形容詞や心理動詞を直接修飾してはいない。

6) “真”と連用されておらず、形容詞・心理動詞を修飾している。

十七／十八 昨天晚上,我放学回来以后,邮递员来了。他给我带来一个包裹,里面是外婆给我的礼物。^{十七}这个礼物可了不得啦,保证你猜也猜不到:是一只手表!太棒了!

…省略…

妈妈叫我上床睡觉。我想戴着手表睡觉,可妈妈说这样对手表不好。我就把手表放在床头桌上,这样只要我一翻身就能看到它。后来,我听见大门开了:是爸爸回来了。^{十八}我可高兴了,因为我能给他看看外婆给我的礼物。我下了床,把手表戴好,从房间里跑出来。

二十五 二十年来的差事,没作过什么错事,但我就这样卷了铺盖。弟兄们含着泪把我送出来的,我还是笑着;^{二十五}世界上不平的事可多了,我还留着我的泪呢!

十七では、“可”は“了不得（すばらしい）”を修飾している。この述語は形式的には可能補語であるが、意味的には形容詞と通じる。十八では“高兴”、二十五では“多”が“可”の修飾を受けており、ともに形容詞を直接修飾する点で、統語的に程度副詞の振る舞いに合致する。また、文末には“了”または“啦”が現れているが、“太……了”の用法に見られるような、程度が高いことを表す語気助詞“了”の用法と思われ、この点からも、程度副詞と認められる。

7) “真”と連用し、形容詞を修飾している。

七 为维持农场的存在，总得作点什么给人们瞧瞧，所以每年必开一次农产品展览会。职员们在开会以前，对铁牛特别的和气。

“王先生，多偏劳！开完会请你吃饭！”吃饭不吃，铁牛倒不在乎；这是和农民与社会接触的好机会。他忙开了：征集，编制，陈列，讲演，招待，全是他，累得四脖子汗流。

有的职员在旁边看着，有点不大好意思。所以过来指摘出点毛病，以便表示他们虽没动手，可是眼睛没闲着。铁牛一边擦汗一边道歉：

“幸亏你告诉我！幸亏你告诉我！”

对于来参观的农民，他只恨长着一张嘴，没法儿给人人掰开揉碎的讲。有长官们坐在中间，好象兔儿爷摊子的开会纪念像片里，十回有九回没铁牛。他顾不得照像。这一点，有些职员实在是佩服了他。所以会开完了，总有几位过来招呼一声：

“你真累了，这两天！”

铁牛笑得象小姑娘穿新鞋似的：“不累，一年才开一次会，还能说累？”

二十四 汪霞悟过未来，心里挺后怕。她暗暗地责备自己：“为什么和敌人打交道，这么天真？这么没有见识？”

“对敌人可不能像对同志那样相信。你今天老实得差一点在敌人面前丧失了警惕！^{二十四}这可真危险。”一场短兵接火获胜的刘文彬，用事实教育着汪霞。刘文彬看问题的深远，使得汪霞打心眼儿佩服。在她说，今天又算上了一堂课。

七と二十四では、“可”は“真”を伴う形容詞句を修飾している。形容詞は、“真”ですでに程度を限定されていることから、重ねて“可”により程度が限定されるとは考えにくい。また、七には“了”が現れているが、変化を表す語気の用法であり、程度副詞との呼応とは考えられない。以上から、これらの用例は品詞として程度副詞に分類することはできないと思われる。

8) “是”を修飾している。

十二 几十年过去了，朱老总想起那些永远长眠在长征路上的烈士，仍抑制不住满腔悲痛。红军第五次反围剿的失败，使他难压心头怒火。他戴上“空姐”送来的眼镜，很仔细地查看着地图。

“嗨，十二这些地方我可是太熟悉了，我来给你们领航。”

“老总，空中领航与地面带路可不是一码事，你可领不了。”

“那有什么不同？不管天上还是地下，都得认识路，不然的话怎么走？那就会绕圈子的。”

朱老总一本正经的样子，把我们逗得大笑起来。

二十六 “四方街”是纳西族文化的集中反映，已有800多年历史，云南省专门立法保护以其为主体的丽江大研古城。2月3日的大地震使这里遭受了重大损失，大部分房子已震裂，约1/10的屋子倒塌。77岁的纳西族妇女石莲弟依旧静静地坐在家门前临时搭起的床铺上，喃喃而语：

“震得太厉害了。”她指着已经倒了两面墙的屋子，心疼地说：

“二十六这可是几百年的房子了。”

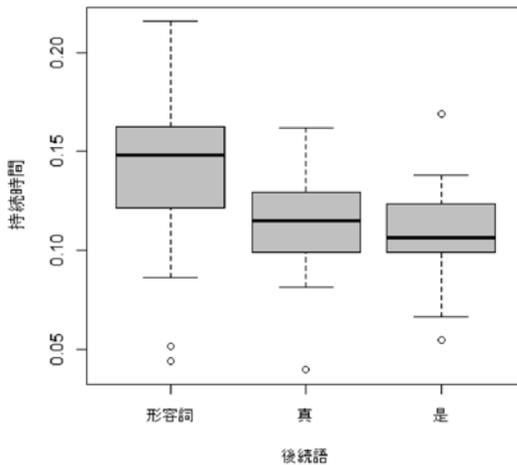
十二、二十六ともに“是”を修飾しているが、十二では“是”の後に“太熟悉了”があるように、程度がすでに限定された形容詞句が実質の修飾対象になる。二十六については、“是”の後に数量詞“几百年”があり、数のスケールを提供している。

次の節では、これらがすべて「3. 表示程度高（程度が高いことを表す）」と判断されながらも、話者の強勢の置き方は異なることを明らかにする。

4. 3. 程度が高いことを表す用法の下位分類の音声比較

「3. 表示程度高（程度が高いことを表す）」用法の“可”について、4. 2節で取り上げた三つの群を取り出し、群間に差がないかを調べるために分散分析を行った。その結果、有意な差があることが分かった ($F(2,70) = 6.849, p = .00192$)。多重比較を行ったところ、“真”を伴う形容詞句を修飾するものと“是”を修飾するもの間には有意な差はなかった ($p = .782$) が、形容詞を直接修飾するものと“是”を修飾するもの間には有意な差があり ($p = .002$)、形容詞を直接修飾するものと“真”を伴う形容詞句を修飾するものにも有意な差があった ($p = .029$)。図2に三つの後続語による“可”の持続時間の違いを示す。

図2 「程度が高いことを表す」用法における持続時間の違い



以上から、母語話者は、語気の判断としては「3. 表示程度高（程度が高いことを表す）」を選んでも、実際に読み上げるときには、典型的な程度副詞の用法に一致する環境、即ち、形容詞を直接修飾し、文末に呼応的な“了”を伴う“可”については、強勢を置いて読み、それ以外の“可”については、強勢を置かずに読んでいることが分かる。ここでの「強勢」は持続時間の観点のみで

あるものの、母語話者が程度副詞とそうではない“可”を区別していることが分かる。

5. 考察

以上から、持続時間の観点のみではあるが、従来通り「3. 表示程度高（程度が高いことを表す）」と「4. 表示愿望终于实现（望みがやっとなかなうことを表す）」の語気を表す“可”は強勢を伴うことが検証できた。

母語話者が幅広い範囲を「3. 表示程度高（程度が高いことを表す）」に含める傾向は、意味論的に興味深いと思われる。母語話者は、“可”の修飾対象に、程度を表す項がまだ束縛されていない述語が現れるときは、この項を束縛するものとして“可”に強勢を置いて読み、程度副詞とする。一方で、程度を含意する述語ではあるが、程度項がすでに程度副詞により束縛されてる、または、具体的な数量表現であるので、束縛を必要としない時にも、“可”は程度が高いことを表すと判断する。しかし、このときは強勢を伴わない“可”であり、単に程度の高さを強調する働きをしているに過ぎず、4) の分類においては、「1. 強調所述内容之真实性（叙述内容が事実であることを強調する）」に相当する働きであると思われる。叙述内容が事実であることを強調する働きは、命題項に対する操作であると考えられるが、命題内に程度項や数量が現れた時に、これらの命題内の項を再度利用するような意味論の可能性も示唆している。

6. まとめ

以上、副詞の“可”の持つ8種類の語気について、12名の母語話者の音声について、“可”の音声持続時間を計測し、「3. 表示程度高（程度が高いことを表す）」と「4. 表示愿望终于实现（望みがやっとなかなうことを表す）」の“可”は他の語気を表すときよりも持続時間が長いと言う点で、強勢を伴うことが分かった。また、母語話者が「3. 表示程度高（程度が高いことを表す）」と判断する範囲は、程度副詞としての“可”よりも広いが、発音では、程度副詞と

しての“可”とそうではない“可”は区別されていることが分かった。

注

* 例文の選定や音声採取用スライドの作成、音声分析の一部について、お茶の水女子大学非常勤講師の王芸嬭先生に手伝っていただいた。ここに感謝申し上げます。また、この論文の初稿は2022年10月30日開催の中日理論言語学研究会（オンライン）で発表した。質疑の時間にいろいろな観点を提案してくださったり、発表後に有益なコメントをくださったりした聴衆の方にお礼申し上げます。本研究は、JSPS科研費JP20K00601の助成を受けている。

参考文献

〈中国語文献〉

- 曹文（2010）《汉语焦点重音的韵律实现》，北京：北京语言大学出版社。
- 陈墨玉・孔江平（2019）《汉语焦点重音感知研究》《中国语音学报》第11辑，147-157。
- 蒋协众・魏会平 2008 〈副词“可”的词类划分及其轻重读规则〉《殷都学刊》2008年，112-117。
- 李冬梅 2014 〈副词“可”的义项分析〉《大庆师范学院学报》第34卷第5期，81-84。
- 李善婧 2009 〈语气副词“可”的语义指向分析——兼论“可”的语义指向分析〉《现代语言（语言应用研究）》2009.01，65-68。
- 林茂灿（2011）《汉语焦点重音和功能语气及其特征》《汉语文化》第6辑，10-23。
- 刘丹青・唐正大 2001 〈话题敏感算子“可”的研究〉《世界汉语教学》2001年第3期（总57期），25-33。
- 罗晓英・邵敬敏 2006 〈副词“可”的语义分化及其语用解释〉《语言学研究》总第121期，2006年第2期，102-109。
- 吕叔湘 1980 《现代汉语八百词》北京：商务印书馆。
- 马秋武 2017 〈汉语语调焦点重音的韵律实现方式与类型〉《韵律语法研究》第二辑（第1期）。

- 沈炯 1985 〈北京话声调的音域和语调〉林焘 王理嘉等著《北京语音实验录》北京：北京大学出版社。
- 石锋 编著 2022 《韵律格局——语音和语义、语法、语用的结合》北京：商务印书馆。
- 王素改 2016 〈论语气副词“可”〉《湖南人文科技学院学报》第33卷第1期，91-95。
- 吴振国 1990 〈关于正反问句和“可”问句分合的一些理论方法问题〉《语言研究》1990年第2期，58-67。
- 熊慧慧 2020 〈语气副词“可”的语义差异及内在联系〉《江西电力职业技术学院学报》第33卷第9期，138-142。
- 徐杰·张媛媛 2011 〈汉语方言中“可VP”问句的性质〉《汉语学报》2011年第2期，60-70。
- 许洁萍·初敏·贺琳 (2006) 〈汉语焦点和语义重音分布的初步实验研究〉《世界汉语教学》2006年第2期，534-539。
- 杨安珍 2017 〈简析现代汉语副词“可”〉《商丘职业技术学院学报》2017年第2期，62-65。
- 杨惠芬 1993 〈副词“可”的语义及用法〉《世界汉语教学》1993年第3期（总25期），173-178。
- 朱德熙 1985 〈汉语方言里的两种反复问句〉《中国语文》1985年第1期。
<英文文献>
- Catford, John Cunnison 1988, 2001 *A practical introduction to phonetics* (Second edition). 竹林滋他訳2006, 2018 『実践音声学入門』東京：大修館書店。
- Garding, Eva 1987. Speech act and tonal pattern in Standard Chinese: constancy and variation. *Phonetica* 44 (1).
- Jin, Shunde 1996. *An Acoustic study of sentence stress in Mandarin Chinese*. Doctoral dissertation, Ohio State University.
- Li, Kening 2009. *The information structure of Mandarin Chinese: Syntax and prosody*. Doctoral dissertation, University of Washington.
- Peng, Shu-hui, Marjorie K. M. Chan, Chiu-yu Tseng, Tsan Huang, Ok Joo Lee, and Mary E. Beckman 2006. “Towards a Pan-Mandarin System for

Prosodic Transcription.” In Jun, Sun-Ah (ed.) *Prosodic Typology*. 228-270 (Chapter 9) .

Selkirk, Elisabeth 1996. Sentence prosody: intonation, stress and phrasing. In J. A. Goldsmith (ed.). *The Handbook of phonological theory*. Blackwell: London.

Xu, Yi 1999. Effects of tone and focus on the formation and alignment of f0 contours. *Journal of phonetics* 27(1) .

<日本語文献>

伊藤さとみ 2022 「中国語の副詞“可”の語気」『お茶の水女子大学中国文学会報』第41号、57-79。